

# せだかむい

発行・古平町史編纂委員会  
編集・古平町史編纂室  
第四十号（一日発行）  
平成五年一月一日

## 北海の古平風土物語

大時化の寄り鯨と八尺曳き鯨

高橋 源 五口

このころ、鯨盛漁期の三月末から五月初めころまでは、鯨の中漁、大漁のあった三、四日後には、決まったように時化が来る。そして、二、三日時化が続いた後のなぎには、又、鯨の中漁、大漁がある。鯨は、この風に乗ってやって来るのである。たまたま時化の早い時には、鯨の沖揚げ作業中に大時化が来ることもある。こんな時には、鯨の詰まった桙網が大波に揺さ

ぶられて破れたり、船が危険になったりすると桙網の口を開いて鯨を放棄し、桙網を積んで急いで陸に引き揚げ、海難を免れることがしばしばあった。こうした時の鯨は、高波にもまれながら、風下の浜辺一帯に打ち寄せられるのである。時には、二百石から三百石以上（鯨一石は、二千五百から三千尾）の鯨が寄つて来るのである。こうした、寄り鯨は、風下の

## 頌春

平成五年元旦



古平町史編纂委員会委員長

越中 庄司

八木金蔵・服部 雄・辻 光彦・大谷喜幸・宮本正敏

山口文彦・西館昌巳・高野俊和・水見八郎・田岸倉治

古平町史編纂室長（総務課長） 津田 宏・村井芳男

## 『開拓使日記』

明治九年七月五日

の波打ちぎわに、キラキラと光りながら重なるように寄っているのである。人々は、たも網やざるですくったり、手籠やバケツを持つて手ずかみで拾い集める。これを家に運んで数の子を取ったり、身欠きにしたり、食用にもする。

岸に寄らないで海底に沈んだ鯨は、海がなきてから、八尺（海底を引き回して、ナマコ、

貝類、シヤコなどを採る漁具）を使い、溜り鯨をすくい取るが、中にはたくさん収穫を上げる者もいた。この八尺曳き鯨は鮮度が落ちていたので、数の子だけを抜き取り、後は鯨粕にしたり、又は、そのまま腐らせて肥料にした。畑作物、果樹の肥料として重宝がられた。

（筆者は、小樽市在住）

近ごろ、きざみこんぶを製造している者の中に、緑青（ろくしょう）や銅屑などを使って、こんぶに着色して販売している者がいるそうだが、これは人体に害があるもので、このようなものを使わないように注意するよう、明治七年十月に本庁・支庁から各戸長へ伝えておいた。

## 有害食品添加物 禁止のお触れ

現在、食品添加物が大きな関心を集めているが、百二十年も前の明治時代、すでにこのような食品添加物が使われていたのである。こんぶに砒素を入れると

は、よく死人が出なかつたものである。こんな危険なものを入れて、果たしてどんな

ところ、中（中）に砒素（ひそ）（その他

キキ目があったのだろうか。

# 「故郷は遠きに ありて思ふもの」

★札幌十口平十△△△

古平町出身のまさに立志伝中の人であつた『札幌古平会』会長の久末鐵男先輩が、四月二十七日黄泉の彼方へ旅立たれ、心より哀悼の意を表します。随分と親身になつて古平のために貢献されお礼のも申し上げようもございません。特に、古平小学校同窓会につきましては、数知

## 故郷を想 う福井孝平

れぬお世話になりました。

先だつて、在札の末政さんから「ススキノつれづれ語り」を送つていただき、久末先輩の半生の一端を知り志半ばにして逝かれた無念を思う時、人生の無常をひしひしと思ひ知らされました。今はただご冥福をお祈りするばかりです。

★東古小十口平十△△△

老いのせいか一年の短きことよ。例外はあるにしても世情あ

まりよい話は無かつたようだ。それでも、平和で健康で過ごせたことを精一杯感謝している私です。あと少しで新しい年を迎えられる、ありがたいことだと思わねば――。

つい二、三日、東京古平会会長の湯田知一先輩から懐かしい写真が送られて来ました。どの顔も不況どこ吹くカゼ？皆さんお元気で、おまけにとても若々しく楽しそうに写つていました。文化会館にでも張つておくことにします。名簿には会員の旧姓・現住所・電話番号も書

いてありますので、知人や縁のある方はぜひご覧になつて下さい。あの人たちの見る夢は、いつも古平の山であり、海でありましょう。湯田会長は、必ず「ふるさとを同じうしたる秋天下」あの素十の句碑が思ひ出されると書いてきます。どうぞ遠く離れてもこの良き古平を忘れずに、いつまでも、楽しい余生を過ごされんことをお祈りしています。

一千年來続いた正月の伝統行事

## トンド焼の餅

高橋 健一

ドンド焼きは、正月の松飾りやしめ縄、マユ玉などを神社の境内や川原に積み上げて燃やす火祭りである。

これは今から千年程も前、小正月になると宮中で行われた火祭り行事が、形を変えて今に伝わる習慣である。

各家庭から持ち寄つたこれらのものが、高く燃え上がるほど福を招くと言つて喜び、ドンドンと勢いよく火を焚く。その様子から、ドンドン焼きと言ふといかにもびつたり？するが、もとは「左義長」（さぎちやう）という行事が始まりである。

これは全国で行なわれている習慣であるが、各地で呼び名はいろいろあるようだ。ドンドン焼き、トンド焼き、サイトウ焼きとも言われているが、北海道では、少しなまつてドンド焼きと言ふのが多く聞かれる。

これは何と言つても、神様の寄り代である松飾りやしめ縄を焼

く行事であるから、その火は清浄、神聖であり、人々はそこに呪力（じゆりよく）を認める。ドンドの火に身体を当てると若返るとか、その火で焼いた餅を食べると無病息災で過ごせるとか、また、書初をかざして高く

上がると字が上手になる、と言ふような伝承が各地にある。近ごろは、ドンド焼きの火で餅を焼いて食べる、というような光景は見られなくなつたが、ドンド焼きの煙を両手で身体にあ

おぎ寄せたり、合掌をする人の姿は絶えない。これなどは、科学万能と思われている時代であっても、昔と変わらぬ、日本人の厚い信仰心の表われであろうか。



# 地域への奉仕と自らも学ぶ

尾山 清

## ■盆踊り大会

古平の盆踊りは、長い伝統もあって有名なものでした。その盆踊りが、お盆が近づいてきても開催される気配も無く、「今年の盆踊りはどうしたんだろう」と、まちでは懸念する声も出ていました。当時は娯楽にもかつれ、生活にも変化の無い時代でした。

いよいよお盆も間近かに迫って来たところのこと、「同志会が主催して、何とか盆踊りをやってほしい」という要望が方々から挙がりました。

盆踊りは、祭典ほど経費を必要としませんでしたので、早速準備に取りかかり、とにかく要望にこたえて開催にこぎつけました。

十三日の夜から、賑やかな太鼓の音と共に、茂木ハルさんの美声が町内一帯に響き渡り、踊りに集まって来た人たちは、短い夏の夜を楽しんでくれたようです。

した。このころになり、頼られた同志会に成長していたことを会員は自覚しました。

## ■清水先生との勉強会

清水先生は、『生長の家』の理事をされている方です。東京での生活が長く、口ひげをたくわ

え、和服に袴をはいた礼儀正しく、もの腰のやわらかな、いかにも宗教家らしい感じのする人でした。奥さんの実家が泥の木だということで、それで疎開して来ていたのです。同志会活動を通じて知り合い、それから私宅を訪れるようになり、それがきっかけで、隔月に会員を対象に勉強会を開くようになりました。内容は、もちろん特定の宗教色などは無い、文化的なものでした。この勉強会には、多くの会員が興味を持ったようです。

## 秋田岳轉歌碑

大十三年八月十七日  
秋田 岳 轉建立

禅源寺五世住職であった岳轉和尚が亡くなられて、すでに三十余年になります。

昨年十月には、檀家のほか関係者が多数集まって、盛大な法要が営まれました。

岳轉和尚は、何気ない日常生活の中で教訓を残し、又その実践者として、多くの人から信頼と尊敬を受けておられました。

ある時、泥の木川の上流に

ある滝を見て「観音滝」と名づけ、ここに観音滝霊場を開きました。

大正十三年十月十七日、観音像を祀って開眼法要を行い、歌碑を建てたのです。

岸打つ波は  
みなかみの観音滝へ  
ひびくならん

「滝の水は、陸に注ぎ

## 古平では神様も仏様も仲良く

仲良く  
ドンドン焼く

日本では、昔から神と仏を共にまつて来たせい、時には全く区別がなくなる。鯉場の親方の信仰が厚かった山形・善宝寺のお札は神棚にまつられ、ドンドン焼きの日には神社で焼く。「お寺のお札を神社で焼くなんて、へんだよネエ?」と、言う人もいれば、「そんなことどっちだっていいよ」と言う人もいます。どうなんでしょうネ?

ては豊作となり、大海に侵入しては豊漁満足となり、永久平和の幸福を祈る意なり」と、この歌の作意の由来を述べておられます。

その後、観音滝周辺や沿道に、三十三体の観音像が祀られたそうですが、今は四体しか残っていません。

戦前は「観音滝のお祭り」として大変賑わったのですが、今は訪れる人も少なく、禅源寺の住職さんと泥の木の人たちが十月十七日にお参りをし、伝統の行事をわずかに守っています。

## 二十世紀初めの《古平郡》

### ■古平市街

▼地理 古平川が沢江村との境界になっていて、余市郡山道村に続き、南は、岩内・古宇二郡につながり、西は美国郡に続き北は日本海に面している。古平川は、余市郡界から流れて浜町に至り、海に注いでいる。

地形は東西に狭く、南北に長くその幅は約一里である。山は、西南から東北に傾斜していて平地に乏しく、古平川下流沿岸の一里ばかりは、幅四、五百間の原野があるが、湿地があつて土地は肥えていない。山ぎわに、わずかに農耕に適する土地がある。平地には、ヤナギ・カバなどがまばらに生えているが、山に入るとカバ・コナラ・シナ・モミジの類が見られる。

海岸は、チョベタン川で市街を二分し、東は浜町で、海岸は平坦で砂浜である。西は、港・入船・新地・丸山の四町で、山と海岸の狭いところは、十余間に

過ぎない。

丸山岬は、市街の西北に突き出ていて古平湾をつくり、岬の沖には岩礁が散らばっている。

▼運輸・交通 陸路は余市市街に通じていて、西は、美国郡船瀬村につながっている。余市までは五里十二町（約二十一ざ）船瀬へは一里十町ほどある。古平湾は、東西およそ千二百間、南北およそ五百間、水深は二十

丈から四十尺で、良好な停泊地である。四月から十月までは、毎日小樽へ小蒸汽船二隻による定期航路があり、また、海産物輸送の季節には、数十隻の和船・帆船が停泊する。小樽への運賃は、米百石につき十七円、みそ・しょうゆ一樽につき六銭、鯨身欠き一本（俵詰め一俵）七十銭などである。

明治三十年の出入り船舶は、汽船六百七十五隻、帆船十五隻、和船四十五隻で、出航も同じである。市街には、郵便局、電信局と、人馬の継立所がある。

▼沿革 昔、古平場所請負人の本陣のあつた所で、今の入船町

【△7日はこんな日】

## 暴風雪で漁船三隻が大、中破 激浪で海岸堤防も決壊

[昭和34年]

十二月三十日、昨日からの風雪が急に強くなり、午前二時ころになつて全町が停電した。知らないで眠っている人も多かったが、港に集まつた人たちは天候の激変に大騒ぎであつた。この深夜からの暴風雪は、古平港に意外に強く、港内につないでい

たスケソ漁船の綱が切れて、大勢丸（十六こ）、照宝丸（十四こ）の二隻は港町の海岸に乗り上げて大破、また、富丸（十九こ）は他の船とぶつかり船尾を破損した。

一方、浜町の旧古平橋手前の海岸堤防が三十二メートルにわたつてはベンザイ泊といい、まずここから開け、次第に東方に広まつて行つたもののようである。

今の港町に運上屋、番屋、板倉などを置いたが、入船町にも番屋が建つていた。後からウタノコロ、\*ウツトロ、チョベタンに漁民が移住して来たが、当時でも港町辺りをミミタレと言つていた。ここは人家が少なく、波がでると山ぎわまで波に洗われるので、船で通行をすると言ふ。安政以降漁民の来る者が多くなり、新地町付近の荒地をひらいて、茶屋、飲食店を開くまでになった。

（古平市街・つづく）

決壊し、一部道路も崩れ、港の航路標識も消灯してしまつた。電話も市外線が切れ、交通・通信共に一時全く途絶した。

この時の風速は三十二メートルもあり、スケソ漁期で港内が狭く、突風で準備が万全で無かつたことが被害を大きくした。

港の拡張工事は、昨年度費による五か年計画が終わつたばかりだが、もう港が狭くなり、町では今度のような災害を予想して第二次拡張工事をさらに強く要請することになった。